
ベン・トー同人小説『B2 Battle of Bread』 byハインケル

鳳圭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベン・トー同人小説『B2 Battle of Bread』
byハインケル

【Nコード】

N5316Z

【作者名】

鳳圭介

【あらすじ】

烏田高校の生徒、春日井新太は、貧乏である。それこそ、『半額弁当』ですら食べれないほどに。親からの少ない仕送りは、昼の分を確保したら、夕飯はパンを食べるしかないほどに。そして、彼は今夜もスーパーのパン売り場を駆ける。

少し長すぎるプロローグ

真昼の校舎。空は青く晴れ渡り、11月の寒い日を精一杯照らしている太陽のおかげで学校の窓際は暖かく、これぞまさしく小春日和という天気の中、ひとりの少年は、かすがいあらた寝ていた。

彼は、ここ烏田高校の2年生の、春日井新太だ。

現在、授業をしている先生は頭には白い毛が数本混じり、目が悪いのか顔と教科書の距離が10cmも離さずに見ている。当然、新太が寝ているのにも気がつかずに授業を進めている。この時間は、新太の貴重な睡眠時間だ。そして、その睡眠時間は、唐突に終わりを告げる。

統制された学校内の時計が一斉に12時25分を指す。その瞬間に、

キンコンカーンコン

—————戦いが……『争奪戦』が始まる。

彼の動きはわずかに早かった。チャイムの鳴る前……時計の針が動く音で机から頭を離し、椅子から腰を浮かせずに最低限度の摩擦で横に動く。そして、新太は先生が振り向く前に教室のドアの前に到達していた。

そして、先生が新太を見る前に教室から出ていった。それから遅れて先生が振り返る。

「んん？誰か席を立ったように聞こえたが、気のせいかな……？」
そんなことを言って、先生は室長に号令を促す。室長もそうじゃない人も、既に慣れているのか何もなかったように号令を済ませる。

その頃、新太は階段を全段飛ばしで飛び降りる。足が痺れるのも構わず、スピードを殺さないように受身をする。その際、軌道を修

正して踊り場の壁にぶつからないように転がる。そして、そのまままた階段を全段飛ばしする。

そして、また走り出す。その彼の隣には、彼より一回り程体の大きい人が並ぶ。

「おう、春日井。相変わらずのスピードだな」

「先輩こそ、抜け出してきましたね？」

彼は、郷田航平。新太の先輩であり、この先に待つ戦いを彼に教えた師である人だ。

「さて、今日はどうなりますかね、先輩」

「今のところはオレらがトップだが、選別がある分、他に取られる率は高くなる。ま、いつも通りだな」

「了解！」

そんな会話を走りながら息ひとつ乱さずに続けている。

そして、彼らが走る先に見えてきたのは棚だ。その棚には、いくつものパンが積まれている。

「お、定番中の定番、焼きそばパン」

「ん、新商品らしきものが3つか……これなら、邪魔は少なくてすみそうだな」

二人がそんな会話を続けている後方では、数十名の少年少女が漫画ならば土煙が立つであろうほどの勢いで、悪鬼羅刹の表情で走ってくる。

その後ろの光景を見ながら、新太は頬をひきつらせた笑いを浮かべる。

「やっぱり僕たち目の敵にされてますね……」

「ま、いつも最初にかっさらっていくからな！」
そう言った後に笑う郷田。

「さて、そろそろ到達だが、『選別』は手早くな？今日の俺の希望は適度に甘いものと、ベーシックなもので。ああ、新商品だけで選んでこなくていいぞー」

「と、言うことは、先輩が壁になるんですね。前みたいになりませ

んよね……………」

「H A H A H A H A、ナンノコトヤラ……………」

「……………」

あさっての方を見て走る先輩を半眼で睨みつけて、すぐに諦めてため息をつく。そして前方の棚に目をやる。新商品の銘柄も見え始めた。

新太は、今回の新商品を自分の視力を活かして確認する。

————『3色パン』ダブルスリット……いや、トリプルスリットが入っているのを見ると、そこには違う具が入るんだろうな。その中身を確認することもなく、新太はこのパンを放棄した。この手のパンはよっぽどうまい組み合わせでもないとマズくて食べられたものではないのだ。

『せんべいパン』……………どこぞのパン屋さんから飛び出してきたやがったな、このパン。そう、どこぞの『人生』と称されるアニメの作中に出てきたパンを、とうとうこちらの世界に召喚しやがったらしい。アニメは良いものだ保証してもいいんだが、パンを作って食うことに保証はしない。これも、見た瞬間に放棄した。

最後の一品が『ヒトデパン』。某『人生』アニメの作中で味の描写はなかったはずだが……………。

……………止めておこう。

そう思いながら新太はいつもどおり、『焼きそばパン』『フレンチトースト』『カレーパン』『アンパン』を探す。棚には数多のパン。だが、大体は整理して並べられている。それを遠くから把握さえできればこの勝負には勝てる。が

……………なんだ？

棚の向こう側に立っているパン売りのおばちゃんが、意地の悪い笑顔を浮かべている。

「先輩、どれだけ持ちこたえますか？」

そう言うと、郷田先輩は不思議そうな顔をしたあとに少し考えて、「15秒持てばいい方だ」

と、答えてきた。

「20秒まで引き伸ばせ」

「命令口調……か。何かあったのか？」

その言葉に頷きつつ、棚の商品の区分けされている隙間を丹念に見る。さっき探していたパンはあっさりと見つかった。そして、新商品が固まって並べられているその間に、何か異質なパンを見つけた。
「……………虹？」

そう。動くたびに少しずつ色の変色するパンを見つけた。まさかという思考が彼の頭を過ぎる。

そのまま、棚の前に到達する。その寸前、郷田先輩は体を180度回転させ、新太を庇うように立つ。背後からは獣とも、鬼とも、叫び声とも取れるような何かが聞こえてきた。それに対し、

「おっしや来いやあああああああ」と雄叫びを返す郷田先輩。

—————持ちこたえてくれよ。

そう思いつつ、新太は棚を左から撫でるように動く。

そして、決めていた4品を一気に掻っ攫う。この間、15秒。そして、最後に目を付けていた虹色に光る何かに手を伸ばそうとする……が、

「ぐはあ!？」

目の前の棚に巨大な影が激突した。言うまでもなく郷田先輩だが。

「20秒持ち堪えてくれて言ったのに！」

そう言いつつ、俺は手にホールドしているパンを一度おばちゃんにパスする。それをおばちゃんは笑顔のまま商品袋にスルーシユートする。そして、

「気を付けることさね、あんたの狙うパンは、1つしか入れてないから」

そう言って、意地悪く笑った。

さて、どうするかな。前方のパン、えもの後方の生徒。カラス目指すは目の前。だが、後方の奴らをあしらいきれるかどうか……………。

そんな考えを頭の端でしながら、彼は向かってきた男子生徒の顔を殴り飛ばす。それに巻き込まれて後方に付いていた3人ほども飛ばされる。が、それ以上巻き込まれることもなく、ソレをきれいに良けてさらに3人程が突っ込んでくる。

1、2発は覚悟しておいたほうがいいかな……………。

そう思っ て身構えた瞬間に、目の前に人が立つ。

「新太あ、気にせず取ってこい！」

そう、これまた郷田先輩だ。その言葉を聞いた瞬間に、新太は後ろを向き、

「また飛ばされんじゃねえぞ！」

と、言い放つ。それに対して、郷田先輩がどんな表情をしたかはわからないが、そんなことを気にせずに彼は虹色に輝くそれに手を伸ばす。

そして、それを――――――――――

昼休みが始まって、5分。その間は、購買のパン売り場は激戦区となる。その5分間の中でも、最初の1分それこそまさしく『地獄絵図』のような状況である。強者の咆哮、弱者の阿鼻叫喚。拳闘士のぶつかり合う音。体格、性別、学年、校則……………それらから瞬間的に開放される時間。そこに駆ける者たちを『鳥』そして、その中でも、飛び抜けて、校外……………スーパ―などでも対等にやりあえる者のことを『鷺』と呼ぶ。

少し長すぎるプロローグ（後書き）

さて、書いてしまったよ、こんなもの。

自分の黒歴史に順調に1Pが刻まれつつあります。というか、既に数十ページ一気に刻み込まれたかんが………もういいや、諦めよう。

桜舞う4月。

少年少女は期待を胸に、あらゆる学校の校門をくぐる。当然、烏田高校も。

その入学式の中に、一人のやる気の無さげな少年がいた。名前は春日井新太。

やる気のなさげな理由は至極単純。志望校に落ちたのだ。しかも、点数的には落ちるか落ちないかの狭間だったらしい。彼よりも成績の悪い人が、運良く少しいい点を取ったらしく、その友達は受かり、新太は落ちた、というわけだ。

自分よりも成績下位の人に負けたという事実もまた彼を無気力にしていた。

———こんな学校、来る意味ない……。

そんなことを考えながら、入学式の話聞き流していた。周りの全員が、先生の話の間に親と楽しげに話している姿に彼は歯ぎしりをしたくなった。彼の親は日本国内にいるし、犯罪をしたわけでもない。まして、仕事が忙しいこともなく。ただ、彼は耐え切れなかった。

親が鉢合わせる度に、周りの目を気にせずに抱きついて、言えないようなことをする。こういう意味では、彼の親は犯罪者の一歩手前である。ついでに、彼はそれを見ている間、砂を吐きたくなる。あるいは、吐き気。ともかく、見に耐えないような光景だ。R指定されてもおかしくないような行為を平然としてのける。

そんなこんなで、見るに耐えないような光景から逃げ出すために彼は中学時代から1人暮らしだ。その一人暮らしを始めてたった数ヶ月で、

『子供ができましたー』

と、電話が掛かってくるものだから、もうどうしようもない。と

りあえず、デキてしまった自分の弟か妹になるかの生命に対して、自分と同じようにならないように祈るしかなかった。が、妹と発覚し、そして数ヶ月後、

『教育に悪いから引き取ってー』

彼のこめかみに青筋が浮かんだのは言うまでもない。とにかく、それに対しては彼は断固拒否と、自重要請を出した。結果、親は仕送りを減らす形で手を打った。手を打つ以前に、自己中心的な考えにも見えるが、気にはしていない。

そして、彼は一人暮らしには少し足りないお金と、土日のバイトでなんとか生計を立てていた。が、高校に入るとお金の減りが増えてしまう。友達付き合いほか諸々……。それによって、彼は頭を悩ませていた。親に手紙を出しても、

『ごめーん、パパの愛は私のものだから、これ以上削りたくないの。それに、デキた妹の面倒も見ないお兄ちゃんが悪いんだからね！』

という手紙が返ってきたので破り捨てた。

ともかく、彼の親は入学式にはこないし、彼自身も来て欲しくな
いと思っている。

が、当然周りがそんなふう楽しげに会話しているのを見て、哀愁を感じないでもない。

時間としては数十分の入学式も、彼にとっては長かった。そして、その長かった入学式も終わり、教室に向かう途中、そこらじゅうに部活勧誘の先輩が立っていた。野球、バスケ、柔道と、男性ばかりのはいるものから、茶道、花道のおしとやかな部活まで。いろんな人が部活勧誘に来ていた。パソコン部らしい人に、科学部だろうか白衣を着た人、手に藁人形を持った心霊研究部らしき妖しき人影。

その中で、異様な人が一人いた。いや、実際には異様でもなんでもない。ただ、周りの異様さゆえに目立つ。その人は制服姿で何を持ってもなく、ただただ腕を組み新入生を……新太達を鋭い目で見
ていた。

そして、新太と一瞬目が合う。その瞬間、その先輩は確かに笑った。それも、気軽そうな、親しみやすそうな笑みではない。良くいえば悪戯をしそうな子供の顔。悪く言えば……そう、悪魔のようだった。

彼は危険を感じ、その先輩から目を逸らす。

が、既に手遅れだったことを、彼は……新太は後々知ることになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5316z/>

ベン・トー同人小説『B2 Battle of Bread』byハインケル

2011年12月24日23時48分発行